

京三中時代の思い出の数々（戦中戦後）

三中 39回 四 方 修

（一）実兄三人に続いて亀岡小から京三中へ

私の旧姓は竹岡。長兄は正夫二八回、次兄は勝美三三回四修、三兄は信夫三四回、そして四男の私は三九回。四人ともに亀岡小から三中へ。校長先生も同じ藤森勝郎先生という珍しいケース。私の入学後、亀岡からの新入生十人が校長室へ呼ばれ「亀岡出身の君たちの先輩は優秀であったから頑張れ」と激励のお言葉をいただいた。

亀岡は三条大橋から二五キロしか離れていないが深い山を越えなければならぬので言葉なども異なり、京都の人からはかなりの田舎者とみられていた。しかしそれも一学期だけで、義理と人情の三中の生徒さん（替え唄の一節）は親しく明るく付き合っていた。いた。

(二) 戦時中の貴重な経験

① 勉強はほど通常通りであったが、農家への勤労奉仕、近江神宮までのクラス対抗競走、中書島から奈良東大寺までの砂袋を下げての深夜行軍、そしてもう一つ、堀川通りなど疎開住宅を縄で引き倒し、その残骸から古釘を抜いて回収するという作業に相当期間かり出された。自宅へ戻っても釘とみると抜きたくなる習性が身につきかけたが、この鉄不足では戦争に勝てないだろうなと痛感した。

② 二年生のとき二組が軍人組と指定され、軍人希望の生徒が集められ、私もその一人であった。その夏、京都府の幹旋で鳥取県美保が関の予科練に経験入隊をする機会を与えられ、軍人組から私たちが希望者の人が参加した。他の公立学校は五年生ばかりであったが、三中は三年生以上が愛知県半田市の中島航空機(株)に動員されて不在だったので、まだ子供のような七人が行くことになった次第。おそらく全国的にも昭和五年生までで予科練の経験を少しでも持ったのは私たちだけだろうと思う。苦しく厳しい訓練の日々、暗い雰囲気、すでに華の予科練からその華は無くなりつゝあった。

③ 昭和二〇年、遂に母校は軍需工場となる。控え室、次いで体育館に旋盤がぎっしりと並べられ、航空機の排気弁・吸気

弁の製作に三年生が取り組まれた。私どもは生徒ではなく職工となったのである。まさに一億総動員。丙種合格の人たちまで召集されたのもこの頃、歓呼の声に送られ緊張して顔面蒼白の召集兵を何度か見送りに行ったが、列車が走り去り、三々五々人びとが帰路について静かになったとき、道端に立ちつくして泣き崩れておられたその奥様と幼い子どもの姿、今もなお私の目に焼き付いている。

(三) 戦争に敗れて、そして三中の終結

① 敗戦によって、お國のために早く戦死したいと希っていた私たちの目の前で、日本の伝統的な文化・価値観それに歴史までが全て否定され、学校・社会・家庭の教育は魂を抜かれた。海軍兵学校から帰って来た信男兄と抱き合って、お國のためにというそのお國がなくなったと号泣した。大袈裟のように思われるかもしれないが、本当に全身から力がぬけたようで、占領軍が進駐する予定日には竹槍で刺し違えようと自らを奮い立て、友人五人と山岳班の山小屋に数日前から住み込んで、その予定日に出町柳まで出て来たが、予定延期で進駐軍はいなくて空振りに終わったという笑うに笑えないこともあった。

② 京三中はそれでも、敗戦後間もなく勉強とスポーツを逐

次復活させた。私の長兄はこの秋に東京文理大を出て三中の教師として赴任して来た。勉強の意欲をなくしてやんちゃと運動に明け暮れていた私に少なからずショックであった。

③ 占領軍の学制改革によつて六三三制が実施されることになり、昭和二年の学期をもつて旧制中学校は消滅、一三年より山城高校となる。三中最後の大運動会はその夏盛大に行われ、市内の女学生も沢山来てくれた。しかし、この学制改革は改悪そのもので山城高校は京三中の校風を受けついではくれなかった。

ともあれ、一中に比して野性味があり、勉強も運動もよく出来た京三中の息吹きは、どんな形にせよ卒業生の心情のなかに生き続けている。まさに、我等が誇りであり、命である。

（後日談、私は三七年前、警察庁交通局で藤森校長先生ご夫妻が叙勲の受賞のために上京されると聞き、同じ局にいた勝美兄に相談して急遽、在京の三中OBに呼びかけてお祝いの会を開催した。四人がお世話になった校長先生に、たとえ少しでも恩返しができた嬉しかった。）